

## あつという間では無かった 2 年間

第 17 期生 古橋 実咲

“入会したのが昨日のことのようだ。本当にあつという間の 2 年だった。”

卒業といったら、大体こんな出だしから入るのが普通だろう。思い返せば、中学や高校、サークルでも、こんな出だしで卒業エッセイを書いた気がする。では、小野ゼミの場合はどうだろうか？

“入会したのがはるか昔のことのようだ。本当に長い 2 年だった。”

そう、小野ゼミは、過去のそれとは正反対だ。学問の面で自信がつけられるような経験がしたい…そう意気込んで入会した 2019 年の春から、5 年くらい経っているのではないかと錯覚するほどである。そしてそれは、小野ゼミでの活動が、あまりにも密度の高いものだったからであろう。本エッセイでは、そんな小野ゼミでの活動について、実際のコンテンツを挙げながら振り返りたいと思う。

まずは、入会してから初めて取り組む通称“コトラ”。そのさながら凶器ともいえる分厚さに気圧されたのを覚えている。果たして自分に出来るのかと不安に思う中、A4 1 枚にびっしりと書かれた先輩の添削コメントを見て、勇気づけられたとともに、本当にこのゼミに入って良かったなと思った。そんな“コトラ”と同時期には、初めてのグループ活動であるディベート大会に取り組んだ。何度も練習をして臨んだ大会であったが、両チームとも敗北を喫し、私達は入会して早々に挫折を味わうこととなった。涙を流す同期もいる中、先生や先輩方が、“結果が全てではなく、その過程から何を学ぶかが重要だ”という言葉をくださった。これは 2 年経った今でも、私の基本的なスタンスとして根付いている。大会のすぐ後には、KUBIC に取り組んだ。最初は良いプランが思いつかず諦めかけていたが、幾度となくアドバイスをくださった先生や先輩方、一緒にやろうと手をあげてくれた同期のおかげで、最後には形にすることが出来た上に、企業賞を頂くことが出来た。初めて学問の面で賞を頂けたという経験は、かけがえのないものになった。(ちなみに、偶然か必然か、このチームのメンバーである 3 人が最終的な 17 期生となった…)そして、メインコンテンツである三田祭論文では、初めての長期のグループ活動ということもあり、様々な壁に突き当たった。また、ここで自分の力不足と向き合うことにもなった。困難ばかりであったが、最後には論文を完成させ、海外学会で発表することが出来た上に、賞を頂くことが出来た。多くの苦悩があっただけに、達成感はひとしおであった。最後に、卒論について、仮説が一向に決まらず、また、仮説が決まったと思ったら文章の執筆が上手くいかずと、本当に難産であった。自分の力不足を実感しつつも、先生や先輩方、同期が、幾度となくアドバイスしてくださったのおかげで、何とか形にすることが出来た。小野ゼミという質の高い環境において、自分の力で何か作り上げることが出来た経験は、私の誇りとなった。

これだけ書いても、まだまだ書ききれない。それが小野ゼミである。こうして振り返ると、小野先生、先輩方、同期や後輩の、親身なサポートがあったからこそ、1 つ 1 つの活動の過程で大きく成長し、かつ、それを成果に繋げることが出来たのだと改めて思う。皆さま、本当にありがとうございました。4 月からも、小野ゼミで得たものを胸に、“長かった”といえる社会人生活を送れるよう、精進します。